

【雪間の草】 ゆきまのくさ

冬、一面の銀世界であった山の麓も、待ちこがれた春の訪れにより地表があちらこちらに姿を現すようになっていきます。雪間の草はその地表に現れた初々しい緑をいいます。

下萌に似た言葉ですが、下萌は雪の下、あるいは雪に限らず枯れ草の下から出る芽も含むようです。

下萌は密かに思う恋心(下燃)と掛けて用いられ、歌語として定着していますが、雪間の草は雪間として歌語につらなり、若菜、若草と絡めて詠まれています。

茶の湯の世界において「雪間の草」は単なる季節を捉えた銘のひとつに止まるものでないことは皆様ご存知のとおりです。

・紹鷗ワビ茶の心は、新古今集の中、定家朝臣の歌に、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ

この歌の心にてこそあれと申されしと也、花紅葉はすなわち書院台子の結構にたとへたり。その花もみちをつくづくとながめ来りて見れば、無一物の境界浦の苫屋也。(中略)又、宗易今一首見出したりとて、常に二首を書付信ぜられし也、同集家隆の歌に

花をのみ待らむ人に山里の雪間の草の春を見せばや

これ又相加へて得心すべし。

『南方録』より

『南方録』(立花実山編・元禄三年(1690)頃)では上記二首が利休の侘びの心を伝える歌とされています。

『南方録』の意図は「世上の人(中略)花紅葉も我心にある事をしらず。只目に見ゆる色ばかりを楽しむ也。」とあるように、目に見える花を喜ぶのではなく心の中にある花や紅葉こそ真に価値があるのだと説いているのです。

私はこのくだりは『徒然草』137段の「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。…」の影響を感じてなりません。無常観の文学から侘びへの展開を示す史料といえるのではないのでしょうか。

『南方録』より古く『無住抄』(通称『石州三百ヶ条』。片桐石州の口伝『茶道三百条』を無住軒小泉了阿が筆記。延宝元年(1673)石州没後の編)にも珠光、引拙、紹鷗、利休の心を古歌に当てはめた興味深い例があります。

それによれば、珠光と利休は「見わたせば…」の歌、

引拙は「淋しさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕ぐれ」

紹鷗は「村雨の露もまだ干ぬ楨の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮」の歌を茶の心としています。

家隆の雪間の草の歌は『南方録』から茶書に登場するということになります。

(原典は藤原家隆の私家集『壬二集』)

このように古歌と茶趣を結びつけた論法は当時、さぞや新鮮に映ったことでしょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~